

演劇的活動による日本語学習者の動機づけの変化に関する研究

—中国の大学における学習者を対象として—

姚瑶 (九州大学大学院)

本研究は、中国の大学における日本語を専攻とする学習者を対象に、演劇的活動を通して動機づけの変化を調査したものである。

第二言語習得研究または外国語学習研究の中で、学習者の動機づけ研究が重要な要素となり、多くの研究によって報告されている (Gardner 1979; Ellis 1997; Kreshan 1982 など)。日本語学習者の動機づけを扱った研究には、ニュージーランド人大学生を対象にした縫部他 (1995) とタイ人大学生を対象にした成田 (1998) などがある。これらの研究は、動機づけと学習期間の関係や、動機づけと成績の相関を中心に行ったが、実際の教育活動を通して、動機づけの変化を分析する研究はほとんど見当たらなかった。

そこで本研究では、演劇的活動を通して学習者の動機づけの変化に焦点を当て、演劇的活動が動機づけを高める効果があるのかを明らかにすることを目的とする。

調査では、まず中国にある大学の日本語専攻に在籍する学習者 13 名 (三年生) を対象として事前質問紙調査 (動機づけ調査) を行った。次にドラマ再現演劇の活動を行った。活動で使用したのは『ビューティフルライフ ～ふたりでいた日々～』(2000 年、TBS) である。13 名の被験者を 4 グループに分け、4 つのシーンを再現される練習をさせた。活動の時間は 10 回×2 時間であった。最後は学習者に事前質問紙と同じアンケート調査を行った。

質問紙は 18 項目から構成している。測定内容は、内発的動機づけ、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整、無動機に分かれている。「全然そう思わない (1 点)」から、「非常にそう思う (5 点)」までの 5 段階で評定を行う。

t 検定の結果、以下のことが明らかになった。

演劇的活動後の調査における動機づけ尺度の得点は、いずれの下位尺度とも大きな変動を示した。内発的動機づけに関する各項目では、大きな変化が確認された。同一視的調整および取り入れ的調整に関する各項目も上昇する変化が確認された。外的調整の下位尺度では、平均値の僅かの変化が見られたが、有意ではなかった。

最も大きな変化が確認されたのは無動機に関する各項目である。この結果は、日本語学習に対して無関心の状態から関心を寄せる状態に大きく変化したことを示すものである。演劇的活動を通して、日本語学習に対して否定的、消極的な感情を軽減し、積極的に学習に取り組むように変化したと考えられる。

これらの結果から、演劇的活動は、学習者の日本語学習における動機づけに影響を与えたと考えられる。したがって、本調査で行われた演劇的活動は、学習者の日本語学習への動機づけによい影響を与えた学習活動と言えよう。